



巻頭言

「園案内」の写真は、アクセサリーなのか

大場 幸夫

過日、機会を得て、ある地域の幼稚園の訪問をした。あいにく時期がわるく台風シーズンのさなかのことであり、あわただしい訪問になった。園舎のなかを見せていただく前に、「園案内」のパンフレットをいただいた。それは、正しくは「平成十六年度 幼稚園要覧」となっていて、教育目標・概況・沿革・職員組織・組別園児数・園舎平面図などが、主として記載されていた。それらの頁の空欄には、子どもたちの園生活のスナップ写真が、いくつかわわっていた。

この手の園案内の資料に、写真は付き物である。もちろんそれらの写真が、園側のなんらかの意図があつて選ばれたものであることは間違いない。しかしながら、概してそのような案内（要覧）の類では、わざわざ写真の説明をつけてあるものは、それほど多くはない。見ればわ



かるではないか、と言わんばかりに、子どもの笑顔のスナップなどが好んで使われる。

私たちは、子どもたちの笑顔や真剣な取り組みの仕草や表情に「弱い」。そういう映像で、ローン勧誘のコマーシャルがあるが、あの手の「目くらまし」と通じる怖ささえ覚える。要するに、勝手にそれらを見た人は、想像たくましくして、子どもたちの園生活に期待を膨らませる。説明のない笑顔の写真が、その園の実践のリアリティを保障するものである証拠は、どこにもないはずである。いつもにこにこしている子だからか、めったに笑わない子を笑わせたからか、この園にすれば子どもたちは笑顔で過ごせるといふことなのか、いずれにしても、笑顔の説明など減多に見ることがない。

子どもたちの明るく楽しい写真を空欄にはめ込めば、園案内の資料が完成する。その限りでは、写真はレイアウトの付き物以上でも以下でもない。しかも、こうしたグラフィックなデザインとしての処置が、幼児教育についての社会的な通念を、無自覚に作り上げる契機になっていることに、保育者は気づきにくい。「明るい楽しい園生活」という社会的な通念を。その日私がいちだいた「要覧」も、そういう意味で、よく見かける構成でできていた。そのままただくだけで帰れば、これまで訪問した園の紹介資料のひとつに過ぎなかつただろう。

ところが、その日は、園長先生が訪問者に向けて、園の紹介をする中で、その要覧の中の一枚の写真について説明をされたのである。

『たとえば、要覧の表紙に載せたレンゲ畑にいる子どもたちの写真ですが、この畑の持ち主であるAさんが、園児たちのために、毎年のようにレンゲの種を蒔いてくれて、楽しませてくれ



て、ホントにどれほどありがたいことですかねえ。地域の人たちの園児に対する気持ちがあつてもうれいす。』

その写真からは、それがどれくらい広いの広さになるのか定かではない。しかし普通の園庭の三倍や四倍あるいはそれ以上かもしれないほど、広々とした畑に、Aさんが毎年のように、子どもたちのために、レンゲの種を蒔いてくれているという。一面の花畑に、三々五々子どもたちがいる。園長先生の熱を込めた語りによって、一枚の写真にまつわる園と地域とのつながりのエピソードを知ることになった。写真はそのようなつながりを象徴的に表すものだったのだ。訪問の場でそのような話を聴いて、その園の「要覧」に重みが増したように感じられた。

「本文とは関係ありません」とわざわざことわりのついた写真を新聞や雑誌に見かけることがある。しかしこの園の要覧に載せられたスナップ写真は、一枚だけではなく他のスナップ写真にも、しっかりと保育実践を語る中味の濃いストーリーがあつた。果たして、ひとはそのように一連のスナップ写真の意味を、読みとつてくれるだろうか。いや、このときも、園長先生からこの一枚の写真にまつわるエピソードを伺わなければ、そのメッセージ性を理解することはできなかつた。

子どもの写真が載せられるだけで、幼稚園らしさを彩るアクセサリ的な用途に終わっているものが少なくない。要覧が描き出す肝心な園紹介の核心は、ほかならぬこれらの「アクセサリの写真」の方にあるということに、もう一度注目してみたい。

このような案内冊子では、そのレイアウトにおいてメインを補う脇役のように写真を扱って



いることが多いが、実は、保育の肝心かなめはそれらの園生活の風景の中にある。園風景の状況描写が、あまりに日常的であることから、案外保育者自身の着想の中で、figureとしてではなくgroundとして扱われがちなのではないか。その結果、じつくりとかかわる日常の生活そのものをドキュメンタルな資料として活かそうとする理念と、その語り手が保育者自身である、という肝心のところに保育者が気づかずに見過ごすことはないだろうか。

たかが入園案内なのか。そうではなく、「園の顔」として、社会的に園の存在理由を開示するチャンスと見て、保育者のメッセージを示すものであつていいのではないか。

その意味で、概して案内あるいは要覧に工夫がないと言ふこともできる。園の顔としてのこれらの配布物に、語り尽くせないストーリーがあることを、もつと表現してもいいのではないか、とも思えてくる。

保育実践の本質は、このように語り尽くせないストーリーの豊饒さを保障し、子どもたちの育ちのステージとして、いきいきと過ごし、感性を磨くことのできる環境を整えることにあると、私は考える。子どもたちの育ちのステージは、保育者の専門的に成長するプロセスと重なることを忘れてならないだろう。だから、型どおりのパンフレットこそ、ミッションやアカウンタピリティーが問われるものとして、ハートの伝わる案内づくりへと改善の工夫が求められる。こうした小さな発見にも、最近の話題となる園の自己点検自己評価の問題と重なる話題のように、私には思えてならない。

(大妻女子大学)